2004.08.03 ～ 08.11 更新

MM023『假名古事記』上中下三冊。明治七年一月發行、東京中西忠誠／甲斐内藤傳右衛門
坂田鐵安撰［不許翻刻］『假名古事記』三巻　官許　中西忠誠　藏　内藤傳右衛門　版

古事記下卷

十六仁德天皇

大 雀 命。難波の高津の宮に 坐 て。天 下しろしめしき。この天 皇。葛城の曽都毘古の 女 。石之日賣命大 后に 娶 まして。生ませる御子。大江の伊邪本和氣命。つぎに墨江の中津王。つぎに 蝮 の水齒別命。つぎに男淺津間若子宿禰命四柱また上にいへる日向の諸縣の君牛諸が 女 。髮長比賣をめして。生ませる御子。波多毘能大郎子。またの名ハ大日下王。つぎに波多毘能若郎女。またの名ハ長日比賣命。またの名ハ若日下部命二柱また庶妹八田若郎女に 娶 まし。また庶妹宇遲能若郎女に 娶 ましき。この二柱ハ。無御子也。すべてこの大 雀 天 皇の御子等。あハせて六王ましき男王五　柱女王一　柱。かれ伊邪本和氣命ハ。天下しろしめし。つぎに 蝮 の水齒別命も。天下しろしめし。つぎに男淺津間若子宿禰命も天下しろしめしき。この天 皇の御世に。大后石之日賣命の御名代として。葛城部を定たまひ。また太　子伊邪本和氣命の御名代として。壬生部を定たまひ。また水齒別命の御名代として。 蝮 部を定たまひ。また大日下王の御名代として。大日下部を定たまひ。若日下部命の御名代として。若日下部を定たまひき。また秦人を役て。茨田の堤。茨田の三宅をつくりたまひ。また丸邇の池依綱の池をつくりたまひ。また難波の堀江をほりて。海に通し。また小椅の江をほり。また墨江の津を定たまひき。ここに天 皇。高山にのぼりまして。四方の國を見したまひて。詔たまひつらく。國中に烟發ず。國みな貧窮。故いまより三年と至までハ。こと／〻 ＼に人 民の課 役をゆるせと詔たまひき。ここをもて大殿破こぼれて。こと／〻 ＼に雨もれども。かつて修理たまはず。椒をもちてその漏雨を受て。もらざる處に遷避ましき。のちに國中を見しやまへバ。國に烟滿たりき。故人 民冨とおもほして。今はと課 役おほせたまひき。ここをもて百 姓さかえて。役にくるしまざりき。故その御世を稱て。聖帝世とまをす。その大后石之日賣命。はなはだ嫉　妬したまひき。かれ天 皇の所使妾たちハ。宮の中をも得のぞかず。言立バ。足もあがかに嫉妬たまひき。ここに天 皇。吉備海部直が 女 。名ハ黑日賣。それ容姿よしと聞しめして。喚上て使たまひき。しかれどもその大后の 嫉 を 畏 て。本國ににげくだりき。天 皇高臺に坐て。その黑日賣が船出するをみさけまして。歌ひたまはく。おきへにハ。をぶねつららく。くろざきの。まさづこわぎも。くにへくだらす。故大后。この御歌をきかして。大いかりまして。大浦に人をつかはして。追おろして。歩より追去たまひき。ここに天 皇。その黑日賣を戀たまひて。大后をあざむかして。淡道嶋見たまはむと詔たまひて。幸行るときに。淡道嶋にて。 遙 に望まして歌ひたまはく。おしてるや。なにはのさきよ。いでたちて。わがくにみれバ。あはしま。おのごろしま。あじまさの。しまもみゆ。さけつしまみゆ。 乃その嶋よりつたひて。 吉備國に幸行き。かれ黑日賣。その國の山方の地に大坐まさしめて。大御飯たてまつりき。ここに大御羹を煮として。其地の菘菜を採るときに。天 皇その孃子の菘採處にいたりまして。 歌ひたまはく。やまがたに。まけるあをなも。きびひとと。ともにしつめバ。たぬしくもあるか。天 皇上り幸ますときに。黑日賣のたてまつれる歌。やまとへに。にしふきあげて。くもばなれ。そきをりとも。われわすれめや。又歌曰。やまとへに。ゆくハたがつま。こもりづの。した

よハへつつ。ゆくハたがつま。此よりのち。大后。豐 樂したまはむとして。御綱柏を採に。木國に幸行る閒に。天 皇。八田若郎女に婚ましつ。ここに大后ハ。御綱柏を御船に積盈て。還ますときに。水取の司に使ゆる。吉備國の兒嶋の仕丁。これ己が國に退に。難波の大渡に。おくれたる倉人女の船あへり。 乃 語けらくハ。天 皇ハ。このごろ八田若郎女に婚まして。夜晝戯ますを。もし大后ハ。このことときこしめさねかも。しづかにあそび幸行とぞかたりける。故その倉人女。このかたれることを聞て。 即 御船に追近て。仕丁が言つるごとありさま具にまをしき。於是大后。大うらみいかりまして。其御船にのせたる御綱柏をバことごとに海に投うてたまひき。かれ其地を。御津の前とハいふなり。即 宮に入まさずて。その御船をひき避て。堀江にさかのぼらして。河のまに／＼。山代に上幸ましき。此時に歌ひたまはく。つぎねふや。やましろがはを。かはのぼり。わがのぼれバ。かはのべに。おひだてる。さしぶを。さしぶのき。しがしたに。おひだてる。はびろ。ゆつまつばき。しがはなの。てりいまし。しがはの。ひろりいますハ。おほきみろかも。 即 山代よりめぐりて。那良の山の口にいたりまして。歌ひたまはく。つぎねふや。やましろがはを。みやのぼり。わがのぼれバ。あをによし。ならをすぎ。をだて。やまとをすぎ。わがみがほし。くにハ。かづらき。たかみや。わぎへのあたり。如此歌ひて還らして。暫筒木の韓人。名ハ奴理能美が家にいりましき。天 皇。大后山代より上幸ましぬと聞しめして。舍人名ハ鳥山といふ人をつかはしけるときに。送たまへる御歌曰。やましろに。いしけとりやま。いしけいしけ。あがはしづまに。いしきあはむかも。又續て丸邇の臣口子を遣はして。歌ひたまはく。みもろの。そのたかきなる。おほゐこがはら。おほゐこが。はらにある。きもむかふ。こころをだにか。あひおもはずあらむ。又歌曰。つぎねふ。やましろめの。こくはもち。うちしおほね。ねじろの。しろただむき。まかずけばこそ。しらずともいはめ。かれこの口子の臣。この御歌をまをすをりしも。雨大ふりき。ここにその雨をも避ず。前殿戸に參ふせバ。違て後戸にいでたまひ。後殿戸に參ふせバ。違て前戸にいでたまふ。かれ匍匐進赴て。庭中に 跪 をるときに。潦 水紅紐にふれて。青みな紅になりぬ。ここに口子の臣の妹。口日賣。大后に仕へ奉れり。故この口日賣歌ひけらく。やましろの。つつきのみやに。ものまをす。あがせのきみハ。なみたぐましも。爾に大后そのゆゑを問たまふときに。僕兄口子の臣なりとまをしき。ここに口子の臣。またその妹口日賣。また奴理能美。三人して議て。天 皇にまをさしめけらくハ。大后の幸行ゆゑハ。奴理能美が養所虫。一度ハ匐虫になり。一度ハ殼になり。一度ハ飛鳥になりて。三色に變る奇き虫あり。この虫をみそなはしに。いりませるこそあれ。更に異みこころハまさず。如此まをすときに。天 皇。しからバ。吾も。奇異とおもへバ。見に行なと詔たまひて。宮より上り幸行て。奴理能美が家に入坐るときに。その奴理能美。己が養所る三種の虫を。大后にたてまつりき。爾天 皇。その大后の坐る殿戸に御立して。歌 曰。つぎねふ。やましろめの。こくはもち。うちしおほね。さわさわに。ながいへせこそ。うちわたす。ややはえなす。きいりまゐくれ。此天 皇と大后と歌所たる六歌ハ。しつ歌の返うたなり。天 皇。八田若郎女を戀たまひて。御歌をおくりたまへる。その歌。やたの。ひともとすげハ。こもたず。たちかあれなむ。あたらすがはら。ことをこそ。すげはらといはめ。あたらすがしめ。爾八田若郎女の答の歌。やたの。ひともとすげハ。ひとりをりとも。おほきみし。よしときこさバ。ひとりをりとも。故八田若郎女の御名代として。八田部を定たまひき。また天 皇。その弟速總別王を。媒として。庶妹女鳥王を乞たまひき。ここに女鳥王。速總別王に語たまはく。大后の強によりて。八田若郎女をも治たまはず。故不仕奉。吾ハ汝命の妻に爲なむと思といひて。すなはち婚まし

き。是をもて速總別王。復こと奏たまはざりき。 ここに天 皇。直に女鳥王の坐ところに 幸 て。その殿戸の閾の上に坐き。ここに女鳥王。機に坐て。服織せり。かれ天 皇歌よみしたまはく。めどりの。わがおほきみの。おろすはた。たがかねろかも。女鳥王 答 の歌。たかゆくや。はやぶさわけの。みおすひがね。故天 皇。そのこころを知して。宮に還ましき。この時。その夫速總別王の來ませるときに。その妻女鳥王歌たまはく。ひばりハ。あめにかける。たかゆくや。はやぶさわけ。さざきとらさね。天 皇この歌をきかして、即 軍をおこして。殺たまはむとす。かれ速總別王女鳥王。共に逃さりて。倉椅山にのぼりましき。ここに速總別王歌ひたまはく。はしたての。くらはしやまを。さかしみと。いはかきかねて。わがてらすとも。又歌曰。はしたての。くらはしやまハ。さがしけど。いもとのぼれバ。さがしくもあらず。故其地より逃て。宇陀の蘇邇にいたりませるときに。御軍追いたりて。殺まつりき。その軍の將山部大楯連。その女鳥王の。御手に纏せる玉釧をとりて。己が妻にあたへたりき。この後豐 樂したまはむとするときに。氏氏の女ども。みな朝 參す。ここに大 楯 連が妻。其王の玉釧を。己が手に纏て參れり。ここに大后石之日賣命。 自 ら大御酒のかしはを取して。 諸 氏氏の女どもに賜ひき。爾大后。その玉釧を見知たまひて、御酒のかしはを賜はずて。 乃 引退たまひて。その夫大 楯 連を召出て。詔たまはく。其王等无禮によりて。退たまへる。是ハ異なる事なくこそ。夫の奴 や。己が君の御 手にまかせる玉釧を。膚も 烟 きに剥持來て。己が妻に與たることと詔たまひて。 乃 死 刑におこなひ給ひき。亦あるとき。天 皇。豐 樂したまはむとして。日女嶋に幸行るときに其嶋に雁卵生たりき。爾建内宿禰 命 を召て。歌もて。雁の卵生る狀を問したまへる。その歌曰。たまきはる。うちのあそ。なこそハ。よのながひと。そらみつ。やまとのくにに。かりこむと。きくや。於是建内宿禰。歌もて語 まをさく。たかひかる。ひのみこ。うべしこそ。とひたまへ。まこそに。とひたまへ。あれこそハ。よのながひと。そらみつ。やまとのくににかりこむと。いまだきかず。如此まをして。御琴を給はりて。歌 曰。ながみこや。つひにしらむと。かりはこむらし。此ハ本岐歌の片歌なり。この御世に。免寸河の西のかたに。一高樹ありけり。其樹の影。旦日にあたれバ。淡道嶋に 逮 。夕日にあたれバ。高安山を越き。かれ是樹をきりて。船に作れるに。甚捷行船にぞありける。時にその船の號を。枯野とぞ謂ける。故この船をもて。旦夕に淡道嶋の寒泉を酌て。大御水たてまつりき。この船の 破 たるもて。鹽を燒き。その燒 遺る木を取て。琴に作たりしに。その音七里に響たりき。爾歌に。からぬを。しほにやき。しがあまり。ことにつくり。かきひくや。ゆらのとの。となかの。いくりに。ふれたつ。なづのきの。さやさや。此ハ志都歌の返歌なり。此天 皇。御年八十三。御陵ハ毛受の耳原にあり。

十七 履中天皇

伊邪本和氣命。伊波禮の若櫻の宮に 坐 て。天下治めしき。この天 皇。葛城の曽都毘古の子。葦田宿禰の 女 。名ハ黒比賣命に 娶 まして。生ませる御子市邊之忍齒王。つぎに御馬王。つぎに妹青海郎女。亦の名ハ飯豐郎女二柱本難波宮に坐しとき。大嘗に坐て。豐明せす時に。大御酒にうらげて。大御寢ましき。爾にその弟墨江中王。天 皇を取まつらむとして。大殿に火を著たりき。ここに倭の漢 直の祖。阿知直。盗 出て。御馬に乘まつりて。倭に幸まさしめき。故多遲比野にいたりまして。寤まして。此間ハ何處ぞと詔たまひき。爾阿知直まをさく。墨江中王。大殿に火を著たまへり。故率まつりて倭に逃ゆくなりとまをしき。ここに天 皇歌 曰。たぢひぬに。ねむとしりせバ。たつごもも。もちて。こましものねむとしりせバ。波邇賦坂にいたりまして。難波宮を見望たまへバ。其火猶炳くみえたり。爾また天皇歌曰。はにふざか。わがたちみれバ。かぎろひの。もゆるいへむら。つまがいへのあたり。故大坂の山の口にいたりませるときに。女人あへり。その女人のまをさく。 兵 を持る人等。多この山を塞をり。當岐麻道より。めぐりて

越幸ますべしとまをしき。爾天 皇歌　曰。おほさかに、あふやをとめを。みちとへバ。ただにはのらず。たぎまぢをのる。故上り 幸 て。石 上 神 宮に 坐 き。ここにその伊呂弟水齒別命。參赴まして。謁しめたまふ。爾天 皇詔しめたまはく。吾汝命を。若墨江中王と。同 心ならむかとおもほせバ。不相言と詔しめたまへバ。僕ハ穢邪こころなし。墨江中王と同 心にもあらずと答まをしたまひき。亦詔しめたまはく。しからバ。今還り下りて。墨江中王を殺て。上り來ませ。其時にこそ吾かならず相言めと詔しめたまひき。故 即 難波にくだりまして。墨江中王に近く習まつる隼人。名ハ曽婆加理を 欺 て。若汝吾云ことをきかバ。吾天皇と爲り。汝を大臣になして。天下治さむとす。いかにと詔たまひき。曽婆訶理。命の隨とまをしき。爾その隼人に禄多に給て。しからバ汝の王を殺まつれと曰たまひき。ここに曽婆加理。己が王の廁に入ませるをうかがひて。矛もちて刺て殺まつりき。故曽婆訶理を率。倭に上り幸ますときに。大坂の山の口にいたりまして。以爲ハ。曽婆加理。吾ために大 功あれども。すでに己が君を殺まつれるハ。不義しわざなり。しかれどもその功をむくいずハ。無信せしになりぬべし。既にちぎりしごと行はバ。還て其情こそ惶けれ。故その功ハ報とも。其正身をバ。滅してむとぞおもほしける。ここをもて曽婆訶理に詔たまはく。今日ハ此間にとどまりて。先大臣の位をたまひて。明日上幸まさむと詔たまひて。其山の口にとどまりまして。即 假宮をつくりて。忽 に豐 樂せして。 乃 その隼人に。大臣の位を賜ひて。百 官をして 拝 しめたまふに。隼人よろこびて。こころざし遂ぬとぞおもひける。ここに其隼人に。今日大臣と。同 盞の酒を飲てむとすと詔たまひて。共に飲すときに。面を隱大鋺に。其すすむる酒を盛たり。ここに王子先飲たまひて。隼人のちに飲。故その隼人飲ときに。大鋺面を覆たりき。かれ席の下に置せる劔を取出て。その隼人が頸を斬たまひき。乃して明日ぞ上 幸 ける。故其地を近つ飛鳥となづく。倭にのぼりいたりまして。詔たまはく。今日ハ此間にとどまりて。祓禊して。明日參出て。神の宮を 拝 むとすと詔たまひき。故其地を遠飛鳥となづけき。故石 上 神 宮に參出て。天 皇に。政 すでに 平 訖て。參のぼりて 侍 と奏しめたまひき。故召入て。語ひたまひき。天 皇ここに阿知直を。始て藏 官に任たまひ。また粮地をも 給 き。亦この御世に。若櫻部の臣等に。若櫻部といふ名を賜また比賣陀君等に。比賣陀の君といふ 姓 を賜き。また伊波禮部を定たまひき。この天 皇の御年。六十四。御陵ハ毛受にあり。

十八反正天皇

水齒別命。多治比の柴垣の宮に 坐 て。天下治めしき。この天 皇。御身の長九　尺二寸 半 。御 齒 長 一寸 廣 二分。上 下 等くととのひて。すでに珠を貫るがごとくなりき。この天 皇。丸邇之許碁登臣の 女 。都怒郎女をめして。生ませる御子。甲斐郎女。つぎに都夫良郎女二柱ま　た同 臣の 女 。弟比賣をめして。生ませる御子。財 王。つぎに多訶辨郎女。あハせて四王ましき。天 皇。御年六十。御陵ハ毛受野にあり。

十九允恭天皇

男淺津閒若子宿禰命。遠飛鳥宮に 坐 て。天下治めしき。この天 皇。意冨本杼王の妹。忍坂の大中津比賣命に 娶 まして。生ませる御子。木梨之輕王。つぎに長田大郎女。つぎに境之黒日子王。つぎに穴穂命。つぎに輕大郎女。亦の名ハ衣通郎女御名所以負衣通王者之光自衣通出也つぎに八瓜之白日子王。つぎに大長谷命。つぎに橘 大 郎 女。つぎに酒見郎女九柱す　べて天 皇の御子等。九　　柱男王　五　女王この九 柱の中に。穴穂命ハ。天下治めしき。つぎに大長谷命も。天下治めしき。天 皇。はじめ天津日繼治めさむとせし時に。天皇辭詔て。我ハ一長たる病しあれバ。日繼得しらさじと詔たまひき。しかれども大后をはじめて。諸卿等。堅奏た

まへるによりてぞ。天下治めしける。此時新良國主。御調もの八十一艘貢進き。ここに御調の大使。名ハ金波鎭漢紀武とぞいひける。この人藥の方を深く知りき。故皇帝が御病を治まつりき。ここに天皇。天下の氏氏名名の人等の。氏姓の忤過ることを愁まして。味白檮の言八十禍津日前に。玖訶瓮を居て。天下の八十友緒の氏姓を定たまひき。また木梨輕太子の御名代として。輕部を定たまひ。大后の御名代として。刑部を定たまひ。大后の弟田井中比賣の御名代として。河部を定たまひき。天皇。御年七十八。御陵ハ河内の惠賀の長枝にあり。天皇崩まして後。木梨の輕太子。日繼治めすに定まれるを。いまだ即位たまはざりし間に。その伊呂妹輕大郎女に姧て。歌よみし曰。あしひきの。やまだをつくり。やまだかみ。したびをわしせ。したどひに。わがとふいもを。したなきに。わがなくつまを。こふこそハ。やすくはだふれ。此ハ志良宜歌なり。又歌曰。ささばに。うつやあられの。たしだしに。ゐねてむのちハ。ひとハかゆとも。うるはしと。さねしさねてバ。かりこもの。みだれバみだれ。さねしさねてバ。此ハ夷振の上歌なり。ここをもて百官をはじめて。天下の人等。輕太子にそむきて。穴穂御子に歸ぬ。爾輕太子畏て。大前小前の宿禰の大臣の家に逃いりて。兵器を備作たまひき爾時所作矢者銅其箭之内故号其矢謂輕箭也。穴穂御子も兵器を作たまふ此王子所作之矢者即今時之矢者也是謂穴穂箭也。ここに穴穂御子軍をおこして。大前小前の宿禰の家を圍たまふ。爾その門にいたりませるときに。大氷雨ふりき。故歌曰。おほまへ。をまへすくねが。かなとかげ。かくよりこね。あめたちやめむ。爾にその大前小前の宿禰。手を舉膝を打。儛訶那傳うたひ參來。その歌曰。みやひとの。あゆひのこすず。おちにきと。みやひととよむ。さとびともゆめ。此歌ハ。宮人振なり。如此歌つつ參歸て。まをしけらく。我天皇の御子。伊呂兄の王を及兵たまふな。若せめたまはバ。かならず人咲む。僕捕て貢進とまをしき。かれ兵を解て退坐き。故大前小前の宿禰。その輕太子を捕て。率參出て貢進き。その太子。捕られて歌曰。あまだむ。かるのをとめ。いたなかバ。ひとしりぬべし。はさのやまの。はとの。したなきんになく。又歌曰。あまだむ。かるをとめ。したたにも。よりねてとほれ。かるをとめども。故その輕太子をバ。伊余の湯に流まつりき。亦將流たまはむとせし時に。歌曰。あまとぶ。とりもつかひぞ。たづがねの。きこえむときハ。わがなとはさね。此三歌ハ。天田振なり。又歌曰。おほきみを。しまにはぶらバ。ふなあまり。いがへりこむぞ。わがたたみゆめ。ことをこそ。たたみといはめ。わがつまハゆめ。此歌ハ。夷振の片下なり。その衣通王。歌をたてまつる。其歌曰。なつくさの。あひねのはまの。かきがひに。あしふますな。あかしてとほれ。故後に亦戀慕不堪て。追往時に。歌曰。きみがゆき。けながくなりぬ。やまたづの。むかへをゆかむ。まつにハまたじ此云山多豆者是今造木者也。故追到ませる時に。待懷て。歌曰。こもりくの。はつせのやまの。おほをにハ。はたはりだて。さををにハ。はたはりだて。おほをにし。なかさだめる。おもひづまあはれ。つくゆみの。こやるこやりも。あづさゆみ。たてりたてりも。のちもとりみる。おもひづまあはれ。又歌曰。こもりくの。はつせのかはの。かみつせに。いくひをうち。しもつせに。まくひをうち。いくひには。かがみをかけ。まくひには。またまをかけ。またまなす。あがもふいも。かがみなす。あがもふつま。ありと。いはバこそに。いへにもゆかめ。くにをもしぬばめ。如此歌ひて。即共に自死たまひき。故この二歌ハ。讀歌なり。

二十安康天皇

穴穂御子。石上之穴穂宮に坐て。天下治めしき。天皇。伊呂弟大長谷王子のために。坂本臣等が祖根臣を。大日下王の許に遣して。詔しめたまへらくハ。汝命の妹若日下王を。大長谷王子に婚むとす。故貢べしと詔しめたまひき。爾に大日下王。四拝て白たまはく。若

如此る大命も有むかとおもへるゆゑに。外にも出さずて置つ。是恐。大命のまにまに奉 進とまをしたまひき。しかれども言以まをす事ハ。无禮とおもほして。即 其妹の禮物として。押木の玉縵を持しめて。たてまつりき。根臣ハ。即 その禮物の玉縵を盗とりて。大日下王を讒まつり曰。大日下王ハ。勅命を受たまはらずて。己が妹や。等 族の下席にならむといひて。横刀の手上取しばりて怒ましつとまをしき。故天 皇大いかりまして。大日下王を殺て。其王の嫡 妻長田大郎女を取持來て。皇后としたまひき。此より後に。天 皇神牀に 坐 て。晝寢ましき。爾その后と語ひて。汝おもほすことありやとのりたまひけれバ。わが天皇の 敦 の澤けれバ。何の思ことかあらむと答 曰 。ここに其大后の先の子目弱王。是年七歳になりたまへり。この王。其 時。その殿の下に遊ませりき。爾天 皇その少王の殿の下に遊ませることを不 知て。大后詔 言。吾ハ恒おもほすことあり。何ぞといへバ。汝の子目弱王。成人たらむ時。吾其父王を殺しことを知なバ。還て邪 心有矣とのりたまひき。ここに其殿の下に遊ませる目弱王。此言を聞とりて。すなはち天 皇の御寢ませるを竊伺て。その傍なる大刀を取て。乃天 皇の頸を打斬まつりて。都夫良意冨美之家に逃入ましき。此天 皇五十六。御陵ハ菅原の伏見の岡にあり。ここに大長谷王子。當時童男にましける。此事をきかして。慷慨忿怒まして。乃 其兄黒日子王の許に到て。人天 皇を取まつれり。いかにせましとまをしたまひき。然にその黒日子王うちも驚かずて。怠緩におもほせり。ここに大長谷王子その兄を詈て。一にハ天 皇にまし。一にハ兄弟にますを。何もたのもしげなく。ひとのその兄を殺まつれることを聞つつ。驚もせずて怠乎におもほせると言て。即 その衿のくびを握て控出て。刀をぬきて打殺たまひき。亦その兄白日子王に到て。前の如ありさま告まをしたまふに。この王もまた黒日子王のごと緩におもほせりしかバ。即 その衿のくびを握て。引率來て。小治田にいたりて。穴を掘て。立隨に埋しかバ。腰を埋ときにいたりて。兩の目走ぬけてぞ死たまひぬる。亦軍をおこして。都夫良意冨美之家を圍たまひき。爾軍をおこして待 戰 て。射出る矢葦のさかりに散がごとくなりき。ここに大長谷王子。矛を杖につかして。其内を臨まして詔たまはく。我相言る孃子ハ。若この家にやと有詔たまひき。ここに都夫良意美この詔命を聞て。みづから參出て。佩る兵を解て。八度拝て。まをしけるハ。先日に問たまへる女子訶良比賣ハ。侍 。亦五處の屯宅を副てたてまつらむ所 謂五村屯宅者今葛城之五村苑人也。しかるにその正身參向ざるゆゑハ。往古より今にいたるまで。臣連の王の宮に隱ことハ聞ど。王子の臣の家に隱ませることハいまだきかず。ここをもて思に。賤奴意冨美ハ。力をつくして戰とも。さらに無可勝。しかれども己を恃て。隨家に入坐る王子ハ。いのち死とも棄まつらじ。如此まをして。亦その兵を取て。還入て戰き。爾力窮。矢も盡ぬれバ。その王子にまをしけらく。僕ハ傷手悉ぬ。矢も盡ぬ。今ハ不得戰。如何にせむとまをしけれバ。その王子。しからバに無可爲。今ハ吾を殺よと詔たまひき。故刀もてその王子を刺殺まつりて。すなはち己が頸を切て死にき。これより後。淡海の佐佐紀の山の君の祖名ハ韓帒まをさく。淡海の久多綿の蚊屋野に。猪鹿多かり。その立る足ハ。荻原のごとく。指擧たる角ハ。枯樹のごとしとまをしき。このとき市邊之忍齒王を相率ひて。淡海に幸行て。その野にいたりませバ。おのもおのも異に假宮をつくりて。宿ましき。爾明旦。いまだ日も出ぬ時。忍齒王。なにの心もなく。御馬に乘しながら。大長谷王の假宮の傍に到立して。その大長谷王の御伴人に詔たまはく。いまだ寤坐ぬにこそ。早まをすべし。夜ハすでに曙ぬ。獵庭に幸べしとのりたまひて。乃馬を進て出行ぬ。ここに大長谷王の御所に侍人等。うたて物いふ王子なれバ。應愼したまへ。御身をも堅たまふべしとまをしき。即衣のうちに甲を服まし。弓矢を取佩て。馬に乘して出行て。忽に馬より往ならばして。矢をぬきて。その忍齒王を射おとし

て。 乃 亦その身を切て馬楯に入て。土とひとしく埋き。ここに市邊往の王子等。意冨祁王袁祁王二柱。この亂を聞して。逃去ましき。故山代の苅羽井にいたりまして御粮食めすときに。面黥る老人來て。その 粮 を棄き。爾その二 王。粮ハ惜まぬを。汝ハ誰人ぞとのりたまへバ。我ハ山代の猪甘なりと答曰。故玖須婆の河を逃わたりて。針間國にいたりまし。その國人名ハ志自牟之家に入まして。身を隱て。馬甘牛甘にぞ役えいましける。

二十一雄畧天皇

大長谷若建命。長谷朝倉宮に 坐 て天下治めしき。この天 皇。大日下王の妹。若日下部王に娶 ましき。无 子また都夫良意冨美が 女。韓比賣を娶て生ませる御子。白髮命。つぎに妹若帶比賣命二柱。故白髮太子の御名代として。白髮部を定たまひ。また長谷部の舍人を定たまひ。また河瀨の舍人を定たまひき。この時に呉人參渡來つ。その呉人を呉原に置たまひき。かれ其地を呉原と謂なり。初大后日下に坐けるとき。日下の直越の道より。河内に幸行き。爾山の上に登まして。國内望せれバ。堅魚を上て舍を作る家あり。天 皇その家を問しめたまはく。其堅魚を上て作る舍ハ。誰家ぞととはしめたまひしかバ。志幾の大縣主が家なりとまをしき。ここに天 皇詔たまへるハ。奴や。己が家を。天 皇の御舍に似て造れりとのりたまひて。即 人を遣 して。其家を燒しめたまふ時。その大縣主懼 畏て。稽首まをさく。奴にあれば。奴隨さとらずて。過 作れり。甚畏 とまをしき。故能美の御幣物をたてまつる。白き犬に布を縶て。鈴を著て。己が族名ハ腰佩と謂人に犬の繩をとらしめて獻 上。故その火著ることを止しめたまひき。 即 その若日下部の王の許に幸行て。その犬を賜いれて。詔しめたまはく。この物ハ。今日道に得つる竒 物なり。故つまどひの物と云て。賜 入き。ここに若日下部王。天 皇に奏しめたまはく。日に背 て幸行事。甚 恐 。故 己 直に參上て仕 奉とまをさしめたまひき。ここをもて宮に還 上坐ときに。其山の坂の上に行立して。歌 曰。くさかべの。こちのやまと。たたみこも。へぐりのやまの。こちごちの。やまのかひに。たちざかゆる。はびろくまかし。もとにハ。いくみだけおひ。すゑへにハ。たしみだけおひ。いくみだけ。いくみハねず。たしみだけ。たしにハゐねず。のちもくみねむ。そのおもひづま。あはれ。 即 此歌を持しめて。返 使 き。亦あるとき天 皇遊 しつつ。美和河に到ませる時に。河の邊に衣あらふ童女あり。其容姿いと麗き。天 皇その童女に汝ハ誰子ぞと問しけれバ。己が名ハ引田部の赤猪子と謂 とまをしき。故詔しめたまへらくハ。汝不嫁てあれ。今喚てむとのらしめたまひて。宮に還坐き。故その赤猪子。天皇の命を仰待て。既に八十歳を經たりき。ここに赤猪子おもひけるハ。命をあふぎまちつる間に。已に 多 の年を經て。姿體 痩 萎てあれバ。更に恃 なし。しかれども待つる情を顯 しまをさずてハ。 悒 て不忍とおもひて。百取の机代物を持しめて。參出て 獻 き。しかるに天 皇先に 命 りし事をバ既忘らして。その赤猪子に問 曰。汝ハ誰やし老女ぞ。何由ぞ參來つるととはしけれバ。爾赤猪子答 曰。其年の其月に。天皇の命をかがふりて。今日至大命を仰待て。八十歳を經にたり。今ハ容姿すでに耆て。更に恃 なし。然ハあれども己が 志 を顯しまをさむとしてこそ。參出つれとまをしき。ここに天 皇大驚 まして。吾ハ既先の事をわすれたり。然るに汝守志に命をまちて。 徒 に年のさかりを過 しこと。いと愛悲とのりたまひて。婚まほしく心裏ども。その極老ぬるに 憚 たまひて。得婚ずて。御歌をたまひき。其歌曰。みもろの。いつかしがもと。かしがもと。ゆゆしきかも。かしはらをとめ。又歌曰。ひけたの。わかくるすばら。わかくへに。ゐねて

ましもの。おいにけるかも。爾赤猪子が泣涙に。其服る丹摺の袖とほりて濕ぬ。その大御歌に答まつれる歌曰。みもろに。つくやたまかき。つきあまし。たにかもよらむ。かみのみやひと。又歌曰。くさかえの。いりえのはちす。はなばちす。みのさかりびと。ともしろきかも。爾其老女に禄多に給て。返し遣たまひき。かれこの四歌ハ。志都歌なり。天 皇吉野宮に幸ませるとき。吉野川のほとりに。童女のあへる。其形容よかりき。故この童女をめして。宮にかへり坐き。後に更にまた吉野に幸行るときに。其童女の遇りし所にとどまりまして。其處に大御呉床を立て。その御呉床に 坐 て。御琴をひかして。其孃子に儛せしめたまひき。かれ其孃子よく儛るによりて。御歌よみしたまへる。其歌曰。あぐらゐの。かみのみてもち。ひくことに。まひするをみな。とこよにもかも。 即 阿岐豆野に幸まして。御獵せすときに。天 皇御呉床に 坐 けるに。蜹御 腕を咋て。飛いにき。ここに御歌よみしたまへる。其歌曰。みえしぬの。をむろがたけに。ししふすと。たれぞおほまへに。まをす。やすみしし。わがおほきみの。しつまつと。あぐらにいまし。しろたへの。そてきそなふ。たこむらに。あむかきつき。そのあむを。あきづはやくひ。かくのごと。なにおはむと。そらみつ。やまとのくにを。あきづしまとふ。故其時よりぞ。其野を阿岐豆野とハ謂ける。またあるとき。天 皇葛城の山の上に登　幸き。ここに大猪出たりき。 即 天 皇鳴鏑をもちて。其猪を射たまへる時に。其猪いかりて。宇多岐依來。故天 皇その宇多岐を 畏 て。 榛 の上にのぼりましき。爾歌よみし 曰 。やすみし。わがおほきみの。あそばし。ししの。やみしの。うたきかしこみ。わがにげ。のぼりし。ありをの。はりのきのえだ。又一時天 皇葛城山に登　幸る時。百 官の人等。ことごと紅紐つける青摺の衣をたまハりて服たりき。其ときに其向 の山の尾より。山の上にのぼる人あり。すでに天 皇の鹵 簿にひとしく。其装束の狀。及人衆も。相似て頭れず。ここに天 皇 望 て問しめたまはく。茲倭 國に。吾を除て亦王ハ無を。今誰人ぞ如此て行ととハしめたまひしかバ。答まをせる狀も天 皇の 命 のごとくなりき。於是天 皇大いからして。矢刺たまひ。百 官の人等も。 悉 に矢刺けれバ。其人等もみな矢刺り。故天 皇また問しめたまはく。しからバ其名を告さね。各も各も名を告て矢はなたむとのりたまひき。於是答まをさく。吾先とハえたれバ吾先名告せむ。吾ハ。惡事も一言。善事も一言。言離の神。葛城の一言主之大神なりとまをしたまひき。ここに天 皇 惶 てまをしたまはく。 恐 我大神。宇都志意美まさむとハ覺ざりきと白したまひて。大御刀また弓矢をはじめて。百 官の人等の服る衣を脱しめて。 拝 てたてまつりき。爾その一言主之大神手打て其ささげ物を受たまひき。故天 皇の還幸とき。その大神山をくだりまして。長谷山の口におくりまつりき。故この一言主之大神ハ。その時にぞ顯れませる。また天 皇。丸邇の佐都紀臣が 女 袁杼比賣を婚 に。春日に幸ませるとき媛女の道にあへる。幸行を見て。岡邊に逃かくりき。かれ御歌よみしたまへる。その御歌。をとめの。いかくるをかを。かなすきも。いほちもがも。すきばぬるもの。故其岡を。金鉏の岡とぞ號ける。又天 皇長谷の百枝槻のもとに坐まして。豐 樂きこしめすときに。伊勢國の三重の婇。大御盞をささげて 獻 き。ここにその百枝槻の葉おちて。大御盞に浮りき。その婇落葉の　盞　にうかべるをしらずて。猶大御酒たてまつりけるに。天 皇其みさかづきに浮る葉を看そなハして。その婇を打伏。刀 を其頸に刺あて。斬たまはむとするときに。其婇天 皇にまをしけらく。吾身を莫殺たまひそ。 白 べき事ありとまをして。 即 歌 曰。まきむくの。ひしろのみやハ。あさひの。ひでるみや。ゆふひの。ひがけるみや。たけのねの。ねだるみや。このねの。ねばふみや。やほによし。いきづき

のみや。まきさく。ひのみかど。にひなへやに。おひだてる。ももだる。つきがえハ。ほつえハ。あめをおへり。なかつえハ。あづまをおへり。しづえハ。ひなをおへり。ほつえの。えのうらばハ。なかつえに。おちふらばへ。なかつえの。えのうらばハ。しもつえに。おちふらばへ。しづえの。えのうらばハ。ありぎぬの。みへのこが。ささがぜる。みづたまうきに。うきしあぶら。おちなづさひ。みなこをろ。こをろに。こしも。あやにかしこし。たかひかる。ひのみこ。ことの。かたりごとも。こをバ。故此歌を 獻 しかバ。其罪 赦 にき。ここに大后歌はしける其歌曰。やまとの。このたけちに。こだかる。いちのつかさ。にひなへやに。おひだてる。はびろ。ゆつまつばき。そがはの。ひろりいまし。そのはなの。てりいます。たかひかる。ひのみこに。とよみき。たてまつらせ。ことの。かたりごとも。こをバ。 即 天 皇歌 曰。ももしきの。おほみやひとハ。うづらとり。ひれとりかけて。まなばしら。をゆきあへ。にはすずめ。うずすまりゐて。けふもかも。さかみづくらし。たかひかる。ひのみやひと。ことの。かたりごとも。こをバ。此三歌ハ。天語歌なり。故この豐 樂に。その三重 婬をほめて。禄多にたまひき。この豐 樂の日。また春日の袁杼比賣が。大御酒たてまつるときに。天 皇の歌 曰。みなそそく。おみのをとめ。ほだりとらすも。ほだりとり。かたくとらせ。したがたく。やがたくとらせ。ほだりとらすこ。此ハ宇岐歌なり。爾に袁杼比賣歌を 獻 れる。其歌曰。やすみし。わがおほきみの。あさとにハ。いよりだたし。ゆふとにハ。いよりだたす。わきづきが。したの。いたにもが。あせを。此ハ志都歌也。天 皇。御年百二十四。御陵ハ河内の多治比の高鸇にあり。

二十二 清寧天皇

白髪大倭根子命。伊波禮之甕栗宮に 坐 て。天下治めしき。この天 皇。皇后ましまさず。御子もましまさざりき。故御名代として。白髪部を定たまひき。かれ天 皇 崩 まして後。天下治すべき王ましまさず。ここに日繼しろしめさむ王を問に。市邊忍齒別王の妹。忍海郎女。またの名ハ。飯豐王。葛城の忍海の高木の角刺宮にましましき。ここに山部連小楯。針間國の任宰にまかれる時に。其國の人 民名ハ志自牟が新室に到りて。樂す。ここに盛にうたげて。なかばなるとき。次第のままに皆儛ぬ。かれ火燒少子ふたり。竈の傍に居たる。その少子等にも儛しむるに。其ひとりの少子。汝兄先儛たまへと曰バ。其兄も。汝弟先儛たまへと曰。かく相 讓ときに。その 會 る人ども。その相讓さまを咲き。爾つひに兄まづ儛をはりて。つぎに弟 儛 とするときに。詠 ごと爲曰。物部の。我夫子が。取佩る。大刀の手上に。丹畫著。その緒にハ。赤幡を載。あかはた立て。見ゆれバ五十隱。山の三尾の。竹を。本訶岐苅。末押なびかす魚簀。八絃の琴をしらべたるごと。天下治たまひし。伊邪本和氣天 皇の御子。市邊之押齒王の。奴 爾末とのりたまへバ。すなはち小楯連聞おどろきて。床より隨まろびて。其室なる人どもを追いだして。其二柱の王子を。左 右の膝の上に。坐まつりて。泣 悲て。人民どもを集 て。假宮をつくりて。その假宮に坐まつり置て。上驛使たてまつりき。ここに其 姨 飯豐王。聞よろこばして。宮に上らしめたまひき。故天下治めさむとせしほど。平羣臣の祖。名ハ志毘臣。歌垣に立て。其袁祁命の婚むとする美人の手をとれり。その孃子ハ。菟田首等が女。名ハ大魚といへり。爾袁祁命も歌垣に立しき。ここに志毘臣歌 曰。おほみやのをとつはたで。すみかたぶけり。如此うたひて。其歌の末を乞ときに。袁祁命歌 曰。おほおくみ。をぢなみこそ。すみかたぶけれ。爾志毘臣また歌 曰。おほきみの。こころをゆらみ。おみのこの。やへのしばかき。いりたたずあり。於是王子また歌 曰。しほせの。なをりをみれバ。あそびくる。しびがはた

でに。つまたてりみゆ。爾志毘臣いよよ忿て歌曰。おほきみの。みこのしバかき。やふじまり。しまりもとほし。きれむしバかき。やけむしバかき。爾に王子また歌　曰。おふをよし。しびつくあまよ。しがあれバ。うらこほしけむ。しびつくしび。如此歌ひて。鬪明て。各退ましぬ。明旦時。意冨祁命袁祁命二柱はかりたまはく。すべて朝廷の人等ハ。旦にハ朝廷に參、晝ハ志毘が門に集ふ。亦今ハ志毘かならず寢たらむ。其門に人も無む。故今ならずハ。謀難けむとはかりて。即軍をおこして。志毘臣が家を圍て。殺たまひき。ここに二柱の王子等。各に天下讓たまひて。意冨祁命その弟袁祁命に讓たまはく。針間の志自牟が家に住りし時に。汝命名を顯したまはざらましかバ。更に天下しらさむ君とハならざらましを。是既汝命の功にぞありける。故吾兄にハあれども。猶汝命先天下を治めしてよといひて。堅く讓たまひき。故得辭たまはずて。袁祁命ぞ。先天下しろしめしける。御陵河内坂門原也。

二十三顯宗天皇

袁祁之石巣別命。近飛鳥宮に坐て。八歳天下治めしき。この天皇。石木王の女難波王に娶ましき。子ハましまさざりき。この天皇。その父王市邊王の御骨を求たまふときに。淡海國なる賤き老媼參出てまをしつらく。王子の御骨を埋たりし所ハ。もはら吾よく知り。また其御齒もて知べしとまをしき御齒者如三枝押齒坐也。爾民を起て。土をほりて。その御骨を求て。すなはち其御骨を獲たまひて。その蚊野の東の山に。御陵をつくりて葬まつりて。韓帒が子等に。其御陵を守しめたまひき。然後持上其御骨也。故還り上りまして。其老媼をめして。その地をわすれず見置て知りしことをほめて。置目老媼といふ名をたまひき。仍て宮の内に召いれて。敦く廣くめぐみたまひき。故その老媼の住屋をバ。宮の邊ちかく作て。毎日にかならず召き。故大殿の戸に鐸を懸て。その老媼を召むとする時ハ。かならず其鐸を引鳴したまひき。爾御歌よみしたまへる。其歌曰。あさぢはら。をだにをすぎて。ももづたふ。ぬてゆらくも。おきめくらしも。於是置目老媼。僕甚耆老にたれバ。本國に退ま欲とまをしき。かれ白る隨退たまふ時に。天皇見送して。歌　曰。おきめもや。あふみのおきめ。あすよりハ。みやまがくりて。みえずかもあらむ。初天皇難に逢て。逃ましときに。其粮を奪し猪甘の老人を求たまひき。ここに求得たるを。喚上て。飛鳥河の河原に斬て。皆その族どもの膝の筋を斷たまひき。ここをもて今にいたるまで。其子孫倭に上る日。かならずおのづから跛也。故その老の在所を能見志米岐。かれ其地を志米須といふ。天皇。其父の王を殺たまひし大長谷天皇を深く怨まつりて。其靈に報むとおもほしき。故その大長谷天皇の御陵を毀むと欲て。人をつかはす時に。その伊呂兄意冨祁命のまをしたまはく。この御陵を破壞にハ。他人を遣べからず。專僕みづから行て。天皇の御心の如やぶりて參出むとまをしたまひき。爾天皇。しからバ命のまにまに幸行と詔たまひき。ここをもて意冨祁命自から下り幸まして。其御陵の傍を少堀て。還り上らして。既に堀壞ぬとまをせしたまひき。ここに天皇。そのはやく還上りませることを異まして。如何さまに破壞たまひしぞと詔たまへバ。其陵の傍の土を少堀つと答白たまひき。天皇のりたまはく。父王の仇を報むとおもふなれバ。かならず其陵を悉にやぶりてむを。何少堀たまひしとぞのりたまへバ。答　曰。然爲つるゆゑハ。父王の怨を。其靈に報むとおもほすハ。誠に理なり。しかれども其大長谷天皇ハ。父の怨にハあれども。還てハ我從父にまし。亦天下治めしし天皇にますを。今ひとへに父の仇といふこころざしをのみ取て。天下治めしし天皇の陵をことごとに破なバ。後のよの人かならず誹謗まつりてむ。唯父王の仇ハ。報ずハあるべか

らず。故其御陵の邊を少堀つ。既是恥みせまつりてあれバ。後の世に示にも足なむ。如此まをしたまひつれバ。天 皇。これもまた大理なり。命のごとくて可とぞ答詔ける。故天 皇 崩 まして。すなはち意冨祁命天津日繼しろしめしき。この天 皇。御年三十八。八歳天下治めしき。御陵ハ片岡の石坏の岡の上にあり。

二十四仁賢天皇

意冨祁命。石 上の廣高の宮に 坐 て。天下治めしき。この天 皇。大長谷若建天 皇之御子春日大郎女に 娶 まして。生ませる御子。高木郎女。つぎに財 郎 女。つぎに久須毘郎女。つぎに。つぎに小長谷若雀命。つぎに眞若王。また丸邇日爪臣の 女 糠若子郎女をめして。生ませる御子。春日山田郎女。この天 皇の御子たち。 幷 て七柱ます。この中に小長谷若雀命ハ。天下治めしき。御陵河内埴生坂本也

二十五武烈天皇

小長谷若雀命。長谷の列木宮に 坐 て。八歳天下治めしき。この天 皇太 子ましまさず。故御子代として。小長谷部を定たまひき。御陵ハ片岡の石坏の岡にあり。この天 皇既に 崩 まして。日續しろしめすべき王ましまさず。故品太天 皇の五世之孫。袁本杼命を。近淡海國より上り坐しめて。手白髮命に合まつりて。天下を授 奉き。

二十六繼體天皇

袁本杼命。伊波禮の玉穗宮に 坐 て天下治めしき。この天 皇。三尾君らが祖名ハ若比賣をめして生ませる御子。大郎女。つぎに出雲郎女二柱また尾張連らが祖凡 連が妹目子郎女をめして生ませる御子。廣國押建金日命。つぎに建小廣國押楯命二柱また意冨祁天皇の御子手白髮命是大 后也に娶まして生ませる御子。天國押波流岐廣庭命二柱また息長眞手王の 女麻組郎女をめして生ませる御子。佐佐宜郎女二柱また坂田大股王の 女 黒比賣をめして生ませる御子。神前郎女。つぎに茨田郎女。つぎに馬來田郎女三柱又娶茨田連小望之女關比賣生御子。茨田大郎女。つぎに白坂活日子郎女。つぎに小野郎女。またの名ハ長目比賣三柱また三尾君加多夫が妹。倭比賣をめして生ませる御子。大郎女。つぎに丸高王。つぎに耳 王。つぎに赤比賣郎女四柱また阿倍の波延比賣をめして生ませる御子。若屋郎女。つぎに都夫良郎女。つぎに阿豆王三柱この天 皇の御子等。あハせて十 九 王男 七 女十 二この中に天國押波流岐廣庭命ハ。天下しろしめしき。つぎに廣國押建金日命も天下しろしめしき。つぎに建小廣國押楯命も天下しろしめしき。つぎに佐佐宜王ハ。伊勢神宮を拝まつりたまひき。この御世に。竺紫君石井。天皇之命にしたがはずして。无禮こと多かりき。故物部の荒甲之大連。大伴之金村連二人をつかはして。石井を殺しめたまひき。この天 皇。御年四十三。御陵ハ三嶋の藍にあり。

二十七安閑天皇

廣國押建金日命。勾の金箸宮に 坐 て天下治めしき。この天 皇御子ましまざりき。御陵ハ河内の古市の高屋村にあり。

二十八宣化天皇

建小廣國押楯命。檜垣の廬入野宮に 坐 て天下治めしき。この天 皇。意冨祁天皇の御子 橘の中比賣命に 娶 まして。生ませる御子。石比賣命。つぎに小石比賣命。つぎに倉之若江王。また川内の若子比賣をめして。生ませる御子。火穗王。つぎに惠波王。この天 皇の御子等。あハせて五王男 三 女 二故火穗王ハ志比陀君之祖惠波王ハ韋那君。多治比君之祖也御陵身狹桃花鳥坂之上也。

二十九 欽明天皇

天國押波流岐廣庭天皇。師木嶋の大宮に坐て。天下治めしき。この天皇。檜垣天皇の御子石比賣命に娶まして。生ませる御子。八田王。つぎに沼名倉太王敷命。つぎに笠縫王三柱またその弟小石比賣命に娶まして。生ませる御子。上王一柱また春日の日爪臣の女糠子郎女をめして。生ませる御子。春日の山田郎女。つぎに麻呂古王。つぎに宗賀の倉王三柱また宗賀の稲目宿禰大臣の女岐多斯比賣をめして。生ませる御子。橘之豐日命。つぎに妹石垣王。つぎに足取王。つぎに豐御氣炊屋比賣命。次にまた麻呂古王。つぎに山代王。つぎに妹大伴王。つぎに櫻井之玄王。つぎに麻奴王。つぎに橘本之若子王。つぎに泥杼王十三柱また岐多志比賣命の姨小兄比賣をめして。生ませる御子。馬木王。つぎに葛城王。つぎに間人穴太部王。つぎに三枝部穴太部王。またの名ハ須賣伊呂杼。つぎに長谷部若雀命五柱すべてこの天皇の御子等。あハせて廿五王。この中に沼名倉太王敷命ハ。天下治めしき。つぎに橘之豐日命も。天下治めし。つぎに豐御氣炊屋比賣命も。天下治めしき。つぎに長谷部之若雀命も。天下治めしき。あハせて四王なも。天下治めしける。御陵大和檜隈坂合也。

三十 敏達天皇

沼名倉太王敷命。他田宮に坐て。十四歳天下しろしめしき。この天皇。庶妹豐御氣炊屋比賣命に娶まして。生ませる御子。靜貝王。またの名ハ貝鮹王。つぎに竹田王。またの名ハ小貝王。つぎに小治田王。つぎに葛城王。つぎに宇毛理王。つぎに小張王。つぎに多米王。つぎに櫻井玄王八柱また伊勢大鹿首の女小熊子郎女をめして。生ませる御子。布斗比賣命。つぎに寶王。またの名ハ糠代比賣王二柱また息長眞手王の女比呂比賣命に娶まして。生ませる御子。忍坂日子人太子。またの名ハ麻呂古王。つぎに坂騰王。つぎに宇遲王三柱また春日中若子が女老女子郎女をめして。生ませる御子。難波王。つぎに桑田王。つぎに春日王。つぎに大股王四柱この天皇御子等。あハせて十七王ませる中に。日子人太子。庶妹田村王またの名ハ糠代比賣王に娶まして。生ませる御子。岡本宮にましまして。天下治めし天皇。つぎに中津王。つぎに多良王三柱また漢王の妹大股王に娶まして。生ませる御子。山代王。つぎに笠縫王二柱あハせて七柱。御陵ハ川内の科長にあり。

三十一 用明天皇

橘之豐日命。池邊宮に坐て。三歳天下治めしき。この天皇。稲目宿禰大臣の女。意冨藝多志比賣をめして。生ませる御子。多米王一柱また庶妹間人穴太部王に娶まして。生ませる御子。上宮の廐戸豐聰耳命。つぎに久米王。つぎに植栗王。つぎに茨田王四柱また當麻の倉首比呂が女。飯女子をめして。生ませる御子。當麻王。つぎに妹須賀志呂古郎女。この天皇。御陵ハ石寸掖上にありしを。後に科長の中の陵に遷まつりき。

三十二 崇峻天皇

長谷部若雀天皇。倉椅の柴垣宮坐て。四歳天下治めしき。御陵ハ倉椅の岡の上にあり。

三十三 推古天皇

豐御氣炊屋比賣命。小治田宮に坐て。三十七歳天下治めしき。御陵ハ大野の岡の上にありしを。後に科長の大陵に遷まつりき。

古事記下卷終

明治七年一月發行　東京中西忠誠
甲斐内藤傳右衛門

伊勢國松坂白粉町　中西　嘉助
遠江國濱松連尺町　伊勢屋權平
上野國高崎田町三丁目　文心堂源作
下野國栃木萬町三丁目　釜屋　喜平
磐代國若松中一之町　龍田屋半藏
西京柳馬場御池通南　北村四郎兵衛
東京外神田末廣町　英　文藏
同　馬喰町二丁目　森屋　治兵衛
同　芝大神宮前　和泉屋吉兵衛